
春咲東心霊研究会

香月 かえで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春咲東心霊研究会

【Nコード】

N7140H

【作者名】

香月 かえで

【あらすじ】

変わった時期にやってきた変わった転校生。物語はそこから始まる。

FILE 0 :: ごっこ遊び (前書き)

頑張って書きました。

指摘、感想などお願いします。

FILE 0：いっい遊び

最近私のクラスでは、休み時間になるとまるでみんなが一斉に現実から逃げ出すかのように教室中で噂話が始まる。

その噂話の中には都市伝説のような胡散臭い話もあり、男子がそれを女子に喋り、女子はキャーキャー言っていた。

『夜一人で歩いてると、見た事もない女の子に『遊ぼう』って誘われるんだって。その遊びに負けた人は死んじゃうって…友達のお姉ちゃんが言ってたって…』

アホくさ…なんてくだらない話なんだろう。あんな話でキャーキャー言う女子も女子よね。

「友達の友達の…」と続く話は胡散臭いことばかりなのにね。

なんか笑えてきた。

笑い声を囁みしめてるせいか『ククク』と変な笑い声になってる。

あー楽しい。本当にそんな事があるわけじゃないじゃない。

なんて事を考えてる最中だった。

「こんばんは。綺麗なお姉ちゃん」

「……………え？」

突然の状況に私は戸惑ってしまった。

友達の家からの帰り道。

最近頻繁に行われてる警察の補導がイヤで、裏道で近道の線路下を歩いていた時に突然後ろから声をかけられた。

顔立ちこそ整っているものの服装はその容姿に似合わない真っ黒な服を着て。

見た感じで言えば小学校の低学年くらいの女の子に。

何時だと思ってるのよ…。

私は嘆息した。日付が変わって午前2時12分。

こんな時間にこんな小さな子が外に出てるなんておかしくない？

…散々遊んで今帰宅中の高校生が言うのもなんなんだけど。

「ねえ、こんな時間にどうしたの？お父さんやお母さんは？」

「私ひとりだよ。だから、ね？お姉ちゃん暇だから遊んでよ」

ハハッと思わず笑ってしまった。

何？私がバカにした誰かからのあてつけですか？

全く誰だか知らないけど、よくこんな遊びを思いつくなあ。

まあ、疲れてなかったら付き合ってたあげただろうけど。今まさに疲れがピークにきてる。

それに何よりこの子が可哀想だし、家も近所だろうし、適当にあらって別れちゃおう。決定。

「お姉ちゃんね。今疲れちゃってるんだ。また今度遊んであげるから、君も帰ろ？」

「あのね。暇だから鬼ごっこしよ？」

私の言葉、完全にスルーだった…。これは兄、あるいは姉に完璧に脅されてるな…。

「この時間にそんな事したら周りの人に迷惑かかるよ…」

「大丈夫よ！さあやろっ！」

女の子が私の手を引っ張ってくる。

「駄目だって…！私明日も早いからもう帰らなくちゃ…」

そういう私を無視し続け、女の子は『やるの！』と言って聞かない。遊んでたんまり溜まった疲れも相まってか、いい加減イライラしてきたので手を振り払って女の子に、今の状況を見て笑っているであろうヤツらに叫んだ。

「やらないって！こんな時間に鬼ごっこなんて…！！ほら！！どこかで私を見てるんでしょ！？いい加減この子をつれて帰ってよ！」
が。いくら叫んでも誰も出てくる気配もない。

女の子はそんな私の行動が心底おかしいと言わんばかりににキャハハッと笑い、叫んだ。

「何を言ってるの？まあいいや。じゃあいくよ！よくい！ドンっ！」

勝手に始められたところで私の怒りは頂点に達した。

「あなたもいい加減に…！」

と、叫んで振り返った直後だった。

ヌルリ、と。

線路の影から人が現れた。

ようやく姿を出して『ドッキリ成功』とかいう仕掛け人の登場だろう。

だから思いつきり、

「ちょっと！アンタ悪趣味もいいところ…って…は？」

怒鳴ろうとしたところで口が止まってしまった。

クラスメートの誰かだと思ったそれは、白装束で身を包んでいて、前髪が目隠すように覆っていて。

それだけで気味が悪いのに、何よりも驚いたのが。

「く…口が3つ…？」

顔を上げ、前髪が流れた時に現れた顔は両頬に、目から顎に下がるように口があって、口で顔を囲んでる感じ。

アハハハハハハ…!!

ギャハハハハハハ…!!

ウフフフフフフ…

響く笑い声。

それぞれから声が出ていて。

それぞれに歯や舌があって、唾液みたいなものが糸をひいていて。

そこから発せられる声から、三つ全て本物の口だと気付いた時には、足がガタガタと震えていた。

「なに…？ なによ…？ これ…」

私が呟くと女の子は口を開いた。

「コレはね。お姉ちゃんの心の顔を写したモノよ。友達といるとき顔。友達を馬鹿にしてる時の顔。お姉ちゃんの理想の女の人としての顔。」

女の子の顔を見ると、その年頃の子どもなら絶対にしないような、歪な笑い顔になっていた。

まさか…これ、本当に…？

汗が頬をつたう。

ゆっくり、ゆっくりと。女の子と白装束から目を離さないように後ずさりしていたところで。

「きゃっ…!」

足が絡まり、後ろに尻餅をつく形で倒れ込んでしまった。

瞬間。

「ゴオオオオオン!!」

とんでもない音が響く。

白装束がいつの間にか手に持っていた、私なんかを楽に潰せそうな金槌が、倒れていなかったら私がいたであろう位置に振り下ろされていた。

「アハハっ!お姉ちゃん運がいいね!誉めてあげるよ。ぱちぱち」

拍手する子供。

それと異形のバケモノ。

…冗談でしょう…!?

ガリガリ…。白装束が凶器を引きずりながら寄ってくる。

ヤバイ…。ヤバイよ…。

「もしお姉ちゃんがこの子からゴールまで逃げる事が出来たら、お姉ちゃんの勝ちだよ。」

「い、ゴールって…！」

突然脳裏に都市伝説の話をしていた男子生徒の言葉が浮かんだ。

————

『ゲームの終わらせ方は、神社の境内に逃げれば、助かるんだって』

————

「どこの神社でもいいから、その境内まで入れたら勝ちでいいよ。
逃げられたらね」

私は話を聞き終える前に、とうに走り出していた。

今だけは、馬鹿にしていた連中に感謝していた。

確か線路越えてすぐの所に神社があったはず…！そこまで行けば…！

後ろから笑い声と金槌を引きずる音が追いかけてくる。

それを振り切るように、全力で走った。

汗でシャツが背中に張り付こうが知ったこっちゃない。こんな理由も分からないのに殺されてたまるか、と唇を噛みながら走った。

線路下のトンネルをくぐり抜け、酒屋を右に曲がり、郵便局の角を左、満開の桜並木の通りに出れば、ホラ、神社までもう200m足らず。

なんだ。簡単じゃない。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

息は切れ切れ。でも酸素補充はあとだ。
あと100mくらいで境内。

なるほど、私みたいに逃げ切った人がこうして都市伝説を広めたのか。納得。それでも、この異常さはどう伝えればいいのか分からないけど。

と、状況に似合わなすぎるくらい余裕を持てたところでふと気がついた。

あの不快な笑い声と、ガリガリと金槌を引きずる音がいつの間にか聞こえなくなっている。

振り切った…？

ホッと一息ついて、私は後ろを振り返った。

ギャハハハハハハハハハハハハハハハハ！

いつ私の背中に張りついていたのか。
鼻と鼻がくつつくくらい近くに。
アイツの顔があった。

「イヤアアアアアアアアア！！！」

また、走り出そうとしたところで背中を押され、思い切り地面に倒れ込んだ。擦りむいた肘や膝の痛みよりもとにかく逃げなくちゃならないのに、思うように体が動かない。

ガリガリガリガリ…。

音が近づいてくる。

ガリガリ……。

音が止まる。

もうすぐそばにいたというのが気配だけで分かった。

…死ぬの?…そんなの嫌…嫌!! いやっ! いやっ!!

「いや、やめっ…やめて……!!」

「ゲームオーバー♪お姉ちゃん惜しかったね♪」

必死に頼んでるのに…!

…なんで!?!なんで私が…!

—
—
—
—
—
—

続きまして、ニュースの時間です。

今朝未明、S県春見市の神社の前で女性の遺体が近隣の住人に発見されました。

発見されたのは春見市に住む、

「加納アリサ」さん。16歳。高校二年生でした。

警察の調べに寄りますと、事件現場から離れた地点で、被害者の物と思われる携帯電話を発見したとの事で…。

加納さんは何者かに襲われ、逃走した後、事件が発生したと見られています。

警察は殺人事件として、殺人に使われた凶器、目撃者の有無がなかったかなど事件解決の為に捜査を進めています。

続いてのニュースです…。

FILE 0：つつこ遊び（後書き）

はじめまして。

そして稚拙な文章を公開してしまい申し訳ございません。

小説を書きたい！と考えて出来上がったこの作品ですが、

書いた本人が「正直これは…」なんて考えてしまうような出来に…。

結構な時間をかけて書いた結果がこれなので呆れさせてしまうでしょうが、頑張って書き、これからの物を良い作品に仕上げたいので、指摘などバシバシ書いてください。お願いしますm（　　）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7140h/>

春咲東心霊研究会

2010年10月15日17時45分発行